

あなたの入会を心から呼びかけます

# 日本科学者会議(JSA)は こんな学会です

JSAは総合学術学会です。人文科学・社会科学・自然科学を問わず多様な分野の人々が参加しています。専門を超えて交流するとともに、専門家としての知識・経験を生かして、社会的な活動もおこなっています。

科学・技術の進歩は人類の生活を豊かに、便利に変えました。しかし、その反面で環境汚染や気候変動を引き起こし、社会の持続可能性に危惧をもたらしています。また、人類は核物理学の知識を元に核兵器を手に入れました。現在でも、「デュアルユース」

という言葉で正当化しながら広汎な分野の成果を軍事技術に利用しようとする動きがあります。生命科学の進展は医学の画期的な進歩をもたらしました。その一方、人類には新たな生命倫理の確立が求められています。

このような科学・技術の発展に伴う諸課題に向き合うには、自覚と責任を持った科学者が分野を超えて協力する多面的で学際的なアプローチが必要です。JSAはこうした要請に応えるために設立されました。

## JSAの目的

(会則から)

1

日本の科学の自主的・民主的発展につとめ、その普及をはかります。

2

科学者の生活と権利をまもり、研究条件の向上と研究の組織・体制の民主化につとめ、学問研究と思想の自由をまもります。

3

科学における各分野の相互交流をはかり、自主・平等の国際交流をすすめます。

4

科学の反社会的利用に反対し、科学を人類の進歩に役立たせるよう努力するとともに、国内国外の平和・独立・民主主義・社会進歩・生活向上のための諸活動との連帯をつよめます。

5

これらの役割を将来に向けてになっていく科学者を育成します。また、広く科学的精神をもった青年の育成につとめます。

科学を人類に役立て正しく発展させるためには、何よりも科学研究に携わる科学者がその社会的責任を自覚し、科学の各分野を総合的に発展させ、その成果を平和的に利用するよう社会に働きかけねばなりません。

## 科学者の社会的責任って、何だろう？

専門家としての知識や経験を社会のためにいかすこと。科学者でなければ判断できないことを公正に判断し伝えること。それによって、人類社会の福祉を向上させるとともに、科学・技術がもたらすリスクを抑止する役割を果たすこと。

## JSAの具体的な活動は？

- 総合学術研究集会

JSA会員の研究活動の成果を発表する場として2年に一度開催しています。

- 夏の学校

院生・若手研究者を対象に、特定の社会問題に関する議論を通じて問題を科学的に捉え科学者の役割を改めて考える企画です。

- 若手研究者問題委員会

若手研究者を取り巻く様々な課題を取り上げその解決を考える活動を行っています。

軍学共同への反対

「大学改革」への対応

原発のない社会を



## 科学者の社会的責任を果たすために

愛知支部・杏林大学／実験神経病理学 石井さなえ

ワールドトレードセンターのツインタワーのてっぺんからもくもくと煙が上がるのをテレビで見て衝撃を受けたのは、大学院生のころだった。これを引き金にアメリカは対テロ戦争へ突入したが、一方で報復戦争反対の動きも広まった。ニューヨークに住む友人からその署名を求めるメールがきたとき、起きている出来事は決して他人事ではないのだと実感した。

日本でぬくぬくと生きている自分に何ができるのだ

ろう。悶々と考えていたとき、研究室の一人の先生に言われた。「あなたはサイエンスをするために大学院にきたのだから、それ以外のことをするべきではない」。研究者は目の前で起きている出来事に眼をつぶり、自分の研究の進展のみを考えなければならぬということか？自分が目指している世界はそんなものだったのか？疑問や迷いが沸き起こった。そんなとき「研究者だって今を生きる一人の人間として、少し

でも世界がよくなるように動くのは当然だ。」と言ってくれたのは、研究の世界でも頭角を現し始めていたJSAの仲間たちだった。この言葉に救われた。

あれから10数年たった今、「研究者だって」ではなくて、むしろ研究者だからこそ言えること、言うべきこと、やらねばならないことがあると強く思う。とはい

え、世の中で起こる問題は様々な分野が複雑に絡み、一人ではとても太刀打ちできないことが多い。だからこそ、多様な背景を持つ科学者が集い、各々の良心に従い、知恵と知識を寄り合わせて力を生み出すことが大事なのだと思う。JSAはその貴重な場である。



## 研究・教育の「引き出し」を充実させるJSAの活動

茨城支部・茨城大学／歴史学（日本近現代史） 佐々木啓

誘われるままにJSAに入会したのは、大学院博士後期課程の頃でした。最初は理系中心の学会というイメージがあったのですが、支部の幹事会や種々のイベントで色々な人の話を聞くうちに、狭い専門分野に捉われず、学問や大学、研究者のあり方について、真剣に考えている人たちの集まりであると分かりました。あらゆるところで権力への「忖度」が求められる時代に、あえてその真逆を行く、志の高い学会だなと思っています。

JSAの活動を通して出会った同世代の友人たちとは、ずいぶんと濃い関係を築いてきました。合宿やフィールドワーク、研究会などに参加し、真剣に議論したりしてきたことは、自分の研究・教育の「引き出し」を充実させるのに役立ってきました。私は歴史学

（日本近現代史）を専攻していますが、JSAで知った他分野の着想を自分の研究に取り入れることがしばしばあります。多分野の研究者が一緒にいるからこそその利点だなと思います。

社会問題に積極的に取り組んでいるメンバーが多いのもJSAの特徴です。日常生活のなかで理不尽なことに対して立ち向かうのは勇気がいることですが、長いものに巻かれているほうを選びたくなるものですが、学問や教育、あるいは市民運動などの領域で、JSAで出会った仲間たちが頑張っている姿を見ると、自分も頑張ろうという気持ちになります。

多くの方々がこの“熱い”学会に参加し、ともに日本の学問を前進させる輪に加わっていただけることを願っています。



## 研究分野別学会ではできないつながり

京都支部・立命館大学／社会保障 長谷川千春

アメリカと日本における医療保障システムや無保険者問題について、実証的な研究をしています。グローバル化の進展と産業構造の変化、労働編成の再

編のなかで、皆保険体制をとらないアメリカの医療保障のあり方がどうなっていくのか。「オバマケア」といわれる連邦レベルでの改革、そして保険法や医療

扶助を管轄する州・地方レベルでの改革の動きもとらえつつ、主に雇用との関係に関心をもって研究しています。ただ、近年は子育てに追われ、なかなか調査にも出られずに、細々と研究を続けている状況です。

JSAには、京都大学大学院経済学研究科に進学した際に、先輩に紹介されて加入しました。大学院生のころは、新入会員の獲得のための講演会企画などを細々とやっている感じでした。

関わりが深まったのは、女性研究者・技術者委員会の委員となってからです。「ジェンダー」というものを

あまり意識せずこれまでやってきていたのが、子どもが生まれて初めて、自らの内側にある「ジェンダー意識」に気づかされ、また身近な人の母親役割への期待に気づきました。家事・育児と教育を成り立たせるのがやっとで、研究からますます遠のくことに、諦めの思いとともに、この「しんどさ」をどう考えたらいいのか、と悩みました。その時に、女性委員会での企画やメンバーの諸先輩方とのお話が励みとなりました。社会科学分野の方は少ないですが、研究分野を超えたつながりはとても貴重だと思っています。



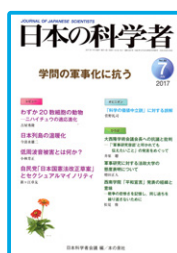
## JSAでなければ経験できないこと

茨城支部・農研機構／昆虫生理学 小滝豊美

私はつくばの農業関係の独立行政法人に勤務しています。職場の分会のメンバーは皆、農業関連の研究者です。また所属する専門学会で出会うのは、皆同じ分野の研究者です。しかし、JSAの様々な活動を通じて出会う人は、そうではありません。職場や専門学会では決して出会えない人文科学・社会科学を専門にする研究者に出会えます。時には、JSAが参加する市民運動に携わる人たちとも出会えます。これこそ、JSAの会員であることの「役得」でしょう。これは自身の認識の幅を拡げ、日常の暮らしの中で

起きていることを理解する助けになります。将来的には、こうしたつながりを元に、専門性を生かしつつ社会問題に対して関わるができるのではないかと思います。こうした「役得」は、総学や会合に参加しなければ得られないのでしょうか。そうではありません。JSAが毎月発行する機関誌「日本の科学者」には時宜を得た論文や記事が掲載されます。この機関誌を通じて、異分野の研究者の知識や発想を吸収することができるのです。

JSAは  
機関誌『日本の科学者』を  
毎月刊行しています。



## 日本科学者会議

日本学術会議協力学術団体／文部科学省登録学会番号 30057

住所

〒113-0034  
東京都文京区湯島1-9-15 HYビル(茶州ビル)9階

連絡先

E-mail: mail@jsa.gr.jp  
Tel: 03-3812-1472 Fax: 03-3813-2363

<http://www.jsa.gr.jp>

jsa 科学

検索